

## コウノトリ 再び大空へ

コウノトリ野生復帰推進連絡協議会 事務局長 大西 信行

### 1. 地域づくり方針・目的

我が国の野生コウノトリが最後まで生息していた兵庫県豊岡市において、コウノトリを再び大空に戻す「コウノトリ野生復帰推進計画」を進めている。

計画では、コウノトリが住める環境こそが、私たち人間にとっても安全・安心で豊かな環境であるとの視点に立ち、人と自然が共生する地域づくりを進めつつコウノトリの野生復帰をめざしている。

### 2. 取り組み内容

地域をあげてのコウノトリの野生復帰に向けて、「コウノトリ野生復帰推進連絡協議会」を設置し、住民・団体・学識者・行政などの様々な主体が協議、連携を図りながら環境整備や普及啓発等に取り組み、野生復帰の推進を図っている。

#### 【保護・増殖・放鳥】

- ・平成17年12月現在、県立コウノトリの郷公園で109羽を飼育
- ・平成17年9月に9羽を放鳥（5羽/自然放鳥・4羽/段階的放鳥）

#### 【環境整備】

- ・田園の自然再生（転作田のビオトープ化、冬季湛水稻作の推進、魚道の整備）
- ・里山林の整備（林間歩道の整備、松・広葉樹の植林）
- ・河川の自然再生（護岸や河川敷を多自然工法整備、魚道整備による連続性の確保）

#### 【普及啓発】

- ・コウノトリ未来国際会議等の各種会議、イベントや環境学習を活用した普及啓発
- ・「コウノトリファンクラブ」活動の推進

### 3. 苦労点・達成度

農薬に頼らない環境創造型農業や生態系豊かな水田づくりは、労力負担が大きく、また、コウノトリは稲の苗を踏み荒らすという被害意識も一部の農業者にはある。これら農業者への理解と参加を図るため、ビオトープ水田や冬季湛水稻作への助成支援を行うとともに、野生コウノトリの行動調査による被害意識の解消に取り組んできた。

その結果、減農薬や無農薬による「ひょうご安心ブランド農産物」の認定面積は、平成14年度の10haから17年度には340haへと急増し、水田魚道の整備については、14年度の6カ所から17年度には88カ所の整備と拡大している。

### 4. 効果・反響

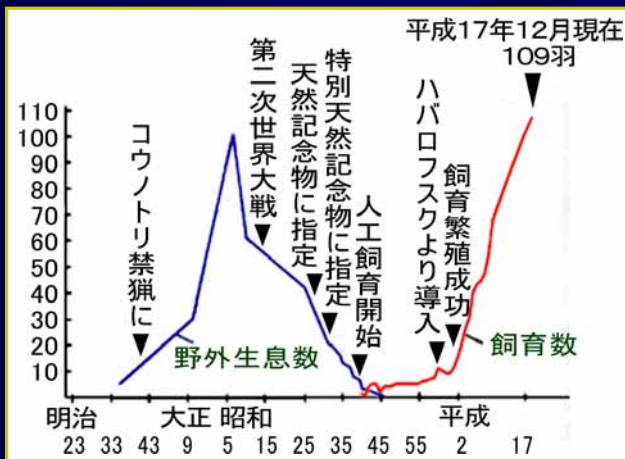
平成17年9月には、念願のコウノトリの放鳥がスタートし、現在、県立コウノトリの郷公園には、平年の2～3倍の多くの人が来園している。

### 5. 今後の課題

放鳥したコウノトリは、今後、全国のまちまちにも飛来する可能性があり、全国の人たちへこのプロジェクトの理解と参加の促進を図っていく必要がある。



# コウノトリ 再び大空へ



コウノトリはロシアのアムール川流域を繁殖地とし、その数は2,000羽程度と推定され、絶滅が危惧されています。越冬のために中国に渡りますが、中には、韓国や日本に渡りそのまま居着いて、繁殖することがあり、兵庫県豊岡市でも、かつてはコウノトリが繁殖していました。

しかしその後、資材として松の伐採や農業における農薬使用、河川改修等の様々な社会の変化に伴い自然環境が損なわれたことにより、昭和46年に国内の野生コウノトリが豊岡盆地を最後に野外から姿を消しました。

このような中、地域をあげての保護増殖の活動により、現在、県立コウノトリの郷公園では 100羽を超えるコウノトリが飼育されるまでになりました。

### コウノトリと共生する地域づくりの取り組み

**【地域づくり方針・目的】**

かつてコウノトリが生息していたエリアは、里山や田んぼ、河川など私たちが暮らす人里の近くです。そのため、平成14年度に策定された「コウノトリ野生復帰推進計画」では、コウノトリが住める環境こそが、私たち人間にとっても安全・安心で豊かな環境であり、人と自然が共生する地域づくりを進めながらコウノトリの野生復帰の推進をめざすこととしています。コウノトリの野生復帰、それは地域社会の再生でもあるのです。

### 推進組織

コウノトリ野生復帰推進連絡協議会

平成15年7月には、住民・団体・学識者・行政などで組織する「**コウノトリ野生復帰推進連絡協議会**」が発足し、様々な主体が協議、連携を図り、田園や里山、河川の自然再生などの環境整備や野生化への馴化、普及啓発などの野生復帰実現に向けた取り組みを展開しています。

## 田園・里山の自然再生



### 【田園の自然再生・里山の整備】

転作田のビオトープ化・常時湛水稻作の推進をはじめ、魚道の整備や有機栽培農業を営む農業者への活動支援を行っています。また、整備不十分となった里山の復活に向けて、林間歩道の整備や植林等に取り組んでいます。

## 河川の自然再生



### 【河川の自然再生】

円山川水系の自然再生に向けて、護岸や河川敷の多自然型工法による整備や湿地整備、樋門の段差解消による河川の連続性の確保等を行っています。これらにより、里山と水田、河川をつなぐ生態系豊かなエコロジカルネットワークが形成されていきます。



**【苦労点・達成度】**

農薬に頼らない環境創造型農業や生態系豊かな水田づくりは、労力負担が大きく、また、コウノトリは稲の苗を踏み荒らすという被害意識も一部の農業者にはあり、これら農業者への理解と参加を図るため、ビオトープ水田や冬季湛水稲作への助成支援を行うとともに、野生コウノトリの行動調査による被害意識の解消に取り組んできました。

その結果、減農薬や無農薬による「ひょうご安心ブランド農産物」の認定面積は、平成14年度の10haから17年度には340haへと急増し、水田魚道の整備については、14年度の6カ所から17年度には88カ所の整備と拡大しています。

**コウノトリと共生する地域づくりの輪を全国へ**



**【コウノトリ放鳥スタート】**

平成17年9月、兵庫県豊岡市の県立コウノトリの郷公園から5羽のコウノトリが大空に放され、野生復帰へ歴史的な一歩が刻まれました。現在、同公園には、平年の2~3倍の人が来園しています。今後、自然環境や社会環境を整えながら、放鳥エリアを拡大し野生への定着を図っていきます。

**【今後の課題】**

放鳥されたコウノトリは、美しい空と緑の大地を求めて全国のまちまちに飛来することが予測されます。

このような中、地域内外の人々へこのプロジェクトの意義を伝え、それぞれのまちで自然と共生する地域づくりの輪を広げていただくため、「コウノトリファンクラブ」をはじめ、コウノトリ未来国際会議や環境学習等の活動を通じて、普及啓発の推進を図っていくことが必要です。